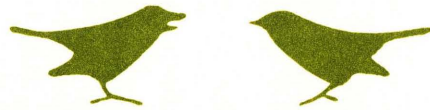


幼 兒 教 育 研 究 雜 誌

女 人 と 子 ども



第 九 卷 第 五 號

目 次

- 會員諸君に告ぐ 高嶺秀夫
- 婦人と子供 下田次郎
- 英國に於ける兒童虐待防止會 吉田熊次
- 子供と談話 後藤ちとせ
- 幼稚園に於ける幼兒保育の實際 池田とよ
- 玩具研究に就て 和田實
- 此ごろの料理 石井泰次郎
- 春の旅(續き) 千歳子
- お伽訓話「猫なしの國」 加藤貞子

フ レー ベ ル 會 行

フレイベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保
育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ提出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノ
ハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達セムガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、
保育參列品幼児成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲ
ナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第二土曜日之ヲ開キ
保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
 - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織
ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 一 雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ利益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一人 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一人 會長ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
 - 第八條 會長ハ客員ヨリ推薦スルモノトス
 - 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
 - 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス
但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
 - 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
 - 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルトコ
トアルベシ
 - 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變
更スルコトヲ得ス

本會役員

| | |
|------|--------------|
| 會長 | 東京女子高等師範學校校長 |
| 主幹 | 東京女子高等師範學校教授 |
| 庶務 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 會計 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 會計 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 庶務 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 庶務 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 庶務 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 庶務 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 庶務 | 東京女子高等師範學校保母 |
| 編輯主任 | 東京女子高等師範學校保母 |

高嶺秀夫 黒田定夫 池田利治 藤井馨 大關清 小田口 和田 武田 福田 和 下田 實

質問規定

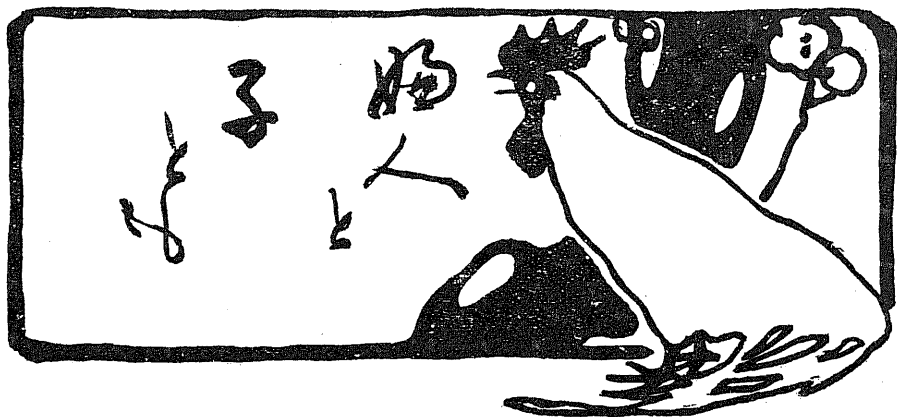
本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

振換口座東京 一七二六六番

本會に御入會なさらうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ケ年分をまとめて振替貯金へ御拂込下されば直に登錄して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵稅共金拾一錢
- 六册前金郵稅共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増



第九卷第五號

會員諸君に告ぐ

(第十四回總會席上に於て)

會長 高嶺秀夫

本會々務の成績益良好にして年々多少の進歩を見ざるなきは蓋し會員諸君一致協同の結果にして其の我國幼兒保育上に貢献する所決して尠少にあらざるを認む。爾今一層親和協力して益幼兒教育の爲めに盡されんことを望む。抑幼兒教育のことたる研究の餘地未だ甚だ多し。會員たるもの益向上の精神を以て研究的に事に従はんことを要す。且夫れ幼兒教育の方法たる。一般教育學以外に特立せる別種のものにわらず。保育の任に當るものは理論的普遍的教育學の研究に於ても決して一般教育者に劣らざらんことを望む。且又時勢の要求は下層民に對する慈善的施設をして稍急ならしむるものあり。會員諸君は餘力のあらん限り、此方面にも盡す所あらんことを望む。

婦人の子供

文學士 下田次郎

婦人と子供と云ふことは通俗に考へれば何でもない、阿母さんは子供を育てるし、他處に行くにも子供を連れて行く、何でもないやうでありませすが併し學問の方から云ふとナカ／＼込み入つた面白い研究の問題です。今日は其の學問の方のことを概略少し御話をして見ようと思ふ。

婦人と子供と云ふものは、身體も精神も大層似た所のあるものです。御承知のやうに子供は頭が大きくて胴が長くて、足と手が短い、さうして皮膚が滑らかで、毛が薄くて、身體が弱い、婦人が其通り、男子から比べると、割に頭が大きくて、胴が長くて、手足が短く、皮膚が滑らかで、毛が薄くて、脂肪に富んで居る。希臘のアリストートル或は近來でも、スペンサーなどは、婦人は發達の止つた者であると云ふて居る。所が其反對にさうでは無いアレはアレで完全なもので發達の止つた

もので無いといふを言つて居る學者もある、フランスのフイエーの如きそれである、是は一朝一夕には言へませぬが、婦人は男子から云ふと早く熟するものであることは事實である。婦人は脊丈が十一二歳から急に伸びて來て十四五歳まで伸びるが、それから伸びない、男子はそれより一二年後れて伸びて、後も亦一二年乃至もう少し伸びる、従つて男子が脊が高い、體量も同様であつて脊丈が出來て後に肉が出來るのであるから體重は婦人は十二三歳から始つて十四五歳までの間が増し方が盛である、男子は十三四歳から十六七歳までが盛である、即ち婦人は男子より一二年早く生長を始め早く終る、即ち婦人の身體は子供からの距離が近いと云ふことがある、男子は子供を距ることが婦人よりも遠いのである、併し動物學の方から云ふと、若さを有つて居ると云ふことは宜いことである、老化——年寄と云ふことは退歩である、即ちそこでエリスの如きは子供と云ふものは動物學上よりいへば上等な一層進んだ身體をもつて居るものである、それが大人に成るに従つて

動物化して来る、即ち割に頭が小さく、手足が長くなつて動物のやうな風に退化して来る、人間の中で最進化した形體は子供である、だから子供に近い婦人と云ふものは形體上男子より上等のものであるといふて居る、動物は猿でも生れた當分といふものは、頭が大きくて、胴が長くて、手足が短い、割に人間に似て居る、胎の内では、他の動物と人間との胎兒は一寸區別の付かぬ程似て居る者がある、胎内に宿つて生れるまでといふものは進化の上向きである、生れて後は下つて行くものであると云ふことを唱へて居る、その説に據ると、詰り人間は生れて後は退化して動物的になる猿でも前に申すやうに生れたちは餘程身體の工合が人間に似て居る、それが追々年を取ると頭が小さく、口が尖つて、顔の角度が強くと、手足が長く毛が伸び、皮膚が黒ずんで皺が出来、脂肪が少くなつて、肉が硬はつて来る、是は年寄のしるしである、即ち老化である、猿でも小さい時には上等の動物的の身體を有つて居るが年を取るに従つて下等の者に下がる、又牡の猿は、子猿と牡の猿と

の中間である、人間は生長しても猿の如く退化しないが、やはり子供から見ると退化して居る、婦人は男子と子供との中頃に止つて身体上優勝の位置を占めて居る、以上は今日エリス其他の學者の通説である、果してさうか、どうかと云ふことは議論の出来る事であるが、今日は唯さう言ふ説がある、婦人は形體上男子よりも上等のものであると云ふ説のあると云ふことを御紹介するに止めておく。

希臘人は常に子供なりと言はれて居た、希臘人は年を取つても何時までも若さを保つて居ると云ふことで、即ち其人種は上等なりといふことである所が人類學上、黄色人種が一番多く若さを保つて居る。

西洋に行くとお前は幾歳かと尋ねるから、此方から試みに幾歳に見えるかと聞くと、私は西洋に居りました時は二十八九歳でありましたが、十七か十八位むだらうと言ふ、一体日本人は若い、黄色人種は一番若い所の身體を保つて居る、黒人、濠太利人は極端な老化的動物的の性質を有つて居る

白人は其の中間に在る、其の點に於て白人は我々
 黄色人種を羨むべきものである、此の身体の變化
 は食物が非常に關係する、食物が良いと身体の變
 異が少い、デ野蠻人の体格の下等なりと云ふのは
 一は食物によるのである、歐羅巴人の上等である
 と云ふのもやはり食物による食物と身体の關係は
 ナカ／＼重大なる意味がある、又下等の動物たと
 へば蝸斗から蛙の牡が生れるか、牡が生れるかと
 云ふことを極めるには食物が預つて大に力がある
 營養がよいと多く牡の蛙が生れる今の東洋の子供
 は東洋流の生活に加ふるに西洋流の生活をやつて
 居る、即ち東洋と西洋の合した間の生活をして居
 る、其の中で、一番東洋と西洋の混り方の激しい
 のは日本である、ソコデ人種學上或は形態學上日
 本の子供と云ふものが如何に變化するかと云ふこ
 とは、今日子供の研究上最も趣味のある、世界
 の子供の中でも一番趣味のある研究問題であると
 チャンパーレンと云ふ學者は言つて居りますが、
 大に注意すべき事だと思ふ日本の子供は研究上唯
 日本ばかりでない、世界的の意味を有つて居るの

でありませう。
 それから今までは身体の方でありましたが、次に
 婦人と子供の精神の方はどうかと云ふと、やはり
 婦人の心は何時までも若さを有つて居る、子供に
 近い、婦人は物を直観してさうして具體的に判断
 をする、又婦人の心の中で色々な觀念が移り代は
 る、其の移り代りが早い、故に言葉も早い、言葉
 は觀念の流れを言語に移したのである、子供もや
 はり其の通り、子供の心は活潑で働きが早い従つ
 て言語も早い、又婦人は感動性が強い能く笑ひ能
 く泣く婦人を泣かすことは大したむづかしいこと
 でない、講談師などは婦人を泣かすことは何でも
 ないといふて居る、所が子供がやはりよく泣くの
 で煎餅を貰はれぬと泣く貰ふと笑ふ感情の強い者
 であつて、贅澤に笑ひもするが泣きもする、婦人
 は子供程贅澤でないが、男子から見ると贅澤に笑
 ひもするが泣きもするソコデ婦人の泣くのと、男
 子の泣くのととは意味が違ふ、言ひ換へれば或る點
 に於ては値打が違ふ、男子は容易に泣かぬ婦人は
 一寸悲しい話を聞いても泣く、芝居を見ても泣い

て居る、即ち婦人は男子ならば泣かぬでも済むことにも泣き泣きが安つばい、婦人の神経は男子から見ると薄弱である、病人の神経も薄弱で直ぐ泣く、直ぐ笑ふ、其の點に於て婦人は子供に近い又病人に近い所がある、ソコで婦人の泣くのは或る意味に於て養生である、稼がにやならぬ男の身泣かぬばならぬ女の身と西洋の詩人は歌ふた、婦人が泣くと云ふことは、それは男子と同じやうに深刻な場合もあるが深くなくて浅い、泣き方が男子よりも餘計ある、子供の深い泣き方でない、浅い泣き方ばかりである、さうしてまた婦人は爆發的である、婦人の心にはダイナマイト、石油の罐が納つて居る、と云ふことを言ひます、全く婦人の心は爆發的である、それだから泣くでも笑くでも一時であつて其の代り後は直ぐ止む、印象―感ずることが瞬時であつて夕立が一しきりあつてすむ、後はさつぱりする、男子は心に創を受け、胸に深くして、さうして何時までも抱いて泣きはせぬが悲んで居る、ソコで文學にしても、哀しみの深刻な文學はやはり男子が作つて居る、

詩でも歌でもさうである。又婦人は想像力が活潑である、或る意味に於て婦人は夢を見て居るやうなもので、子供がやはりさうである、婦人に小説、お伽話が適すると云ふも一は想像力が活潑であるからである、しかし婦人の心の活潑と云ふのは谷川の水が岩に激して、シャーンと云ふて居るやうに割に浅い子供の想像がさうである、男子は大浪がうつて居るやうに大様で一時の激しい想像は無いが、深い想像を有つて居る、又婦人は輕信し易い、當面の都合、早く適應して直ぐそれを應化すると云ふ力が大である、何か人が言ふと初めは信じないが追々澤山言ひ居ると終には信じて仕舞ふ、教會に行つても何時の間にか信者になると云ふのは理窟よりも算る應化の方に因る場合が多くはないかと思ふ、殖民地とかまた人も行つたことの無いやうな所に行つても婦人はその境遇に慣れる、男子は中々慣れぬ又言葉でも婦人は直ぐ覺える、婦人は會話が上手である、男子は逆も女子のやうに出來ぬ、子供がやはり其の通り、極く移り變りが早い、又其の舞

裏面に早く適應する、又婦人は意志が弱いといはれて居る婦人は願ふものだが行ふもので無い、衣物は欲しい、三越なり白木屋なりに行くとなが立つて居る、皆衣服を願ふ人である、如何にして願ひを叶へるかと言ふことはしないで、唯願ふ、子供でもやはりさうである、おもちゃが欲しい、それを實行すると云ふことは他に委ねて、人からして貰ふやうな考で唯願ふ、尤も今日此處に御出での方々は願はれれば實行するだけの實力を有つて居られるから普通の婦人と同じことでは無いが大多數の婦人は願ふ者である、なほ精しく云へば色々あります、これだけでも子供と婦人は似寄りが多い、といふことの一斑が分る、そこで婦人は子供殊に小さい子供を取扱ひ又教へるに適する、婦人と子供は心の調子が合ふて居る、身体が似て居ると云ふことは裏面に心が似て居ると云ふことになる、そこで幼稚園の保姆はことに婦人に適任である、婦人は先天的保姆である、小學校の教員にもやはり婦人が適する是が詰り今日御話をする要旨である、なほ終りに一言別の事をいひます

極く下等の動物は子孫を造るのに雌雄と云ふ別のものを要せない、細胞が分裂して二つの生物になる、それから接合により子孫が出来最後に男性が現はれて来る、即ち元來動物は女性が初めて男性は後に出来たものである、生物の初めには男性は無い、蟻でも雄の蟻はほんの愛情、用をするだけの事である、雄の蟻は生殖作用が濟むと喰ひ殺されて仕舞ふ、下等の動物の雄は實に意氣地が無いものである、女性の爲に酷い目に遭ふ、鳥になると男性の方が大きくなり、冠を以て飾つたり、羽を以て飾つたりしてをる、獅子で言へば鬣を有て居る、追々男性の勢力が強大で著しくなつて来る人間になると、通例男尊女卑であるが、下等の動物は女尊男卑である、何う云ふ加減でそれが引繰り返つて来たか、男女の性質はどうして今日のやうな工合になつて来たか、それを研究することは面白く又有益な事である、日本で言へば、日本の婦人は封建時代更に遡つては王朝時代の様々の教への結果で出来た、人爲の産物である、何處までが天然の婦人で、何處までが人爲の婦人であるか

今日の婦人の心は如何にしてそんなになつたか、婦人は何處まで働けるものか、意志はどうか、感情はどうか、と云ふことを調べることは根本の研究問題である、さうなると自然淘汰性とか色々の八釜しいことになつて来る、其の議論は學者によつて様々で、一定せぬ、併しながら兎に角男女と云ふものは根本的に研究しなければならぬ、唯表面のみを覗て居るのでは本統の根據にはならぬ、今後の研究には男女の根本的研究が必要である、子供は子供で又別に發生學の方から研究すると云ふと非常に面白い、子供と婦人の身体と精神の變化性質を調るべは一の大事業である、婦人と子供に付て書いた十分纏つた本は無いが、色々の本には散見して居る、これを大成せねばならぬ、婦人と子供の比較的研究は學問上甚だ面白いことであるし、又一方男女の研究と云ふことも、學問上頗る興味のある仕事であると云ふことを附け加へて今日は是で御免を蒙ります。

英國に於ける兒童虐待防止會

文學士 吉田熊次君演說

此前に下田君の面白い御話がありまして其際私が出まして、もつと面白い御話でも致すと云ふやうな御披露を辱ふしたのであります、實はさう云ふことは誠に不向きなのでありますから御断り申します。

私の御話をするのは英國に於ける兒童虐待防止會と云ふ題であります、此の兒童虐待防止會と云ふのは、其の名の示してあるやうに子供をむごく取扱はないと云ふことでありまして、丁度動物虐待防止會と云ふのが日本にもございまして此の會で以て牛や馬や鳥や獸を慘酷に取扱ふことを防ぐの目的として居るやうに、牛や馬の代りに子供を慘酷に取扱ふことを成るべく少くしようと云ふのであります、理屈を考へますと子供は動物よりは確かに尊い者で無ければならぬ、若し動物を虐

待して悪いならば子供を虐待して悪いのは言ふまでもないことであり、所が日本には私の知つて居る範圍に於ては今日迄兒童虐待防止會と云ふものが出来て居らぬやうであります、併し外國ではナカ／＼盛に兒童虐待防止運動と云ふものが行はれて居ります、殊に英國の如きは餘程手廣く又餘程組織立つて居るやうであります尤も兒童虐待防止會は最初英國に起つたのではありませぬ。元は亞米利加合衆國の紐育に起つたと云ふことであります、それは今より餘程前のことであります記録に據りますと、一千八百七十五年丁度日本の明治六年でありまして其の年に初めて紐育に此の會が起つたそれはどう云ふ事情で起つたかと申しますると、彼の地に於ても兒童虐待防止會よりは動物虐待防止會の方が早くあつたのであります、それで或宗教家が一人の肺病患者を自分が引受けて保護してやつたことがある、其の人は婦人であつたのであります、其の人を引受けて養つて居りますると其隣りの部屋で或る子供が朝から晩迄其の両親に虐待せられる其の叫聲が絶えず病人に聞

えますので此の死にかけた肺病患者が非常に心配をしてどうかして彼の子供を救つてやりたいと云ふことを願つた、それで其の慈善家もどうかして其の子供を救つてやらうと思つて早速其の兒童を虐待する家に行つて談判をしてそれを養女にでも呉れて呉れ、私の方の團體で救つてやらうと云つた處が承知しない、警察の方でもさう云ふことはまだ規定が無いから取扱ふことは出来ぬと云ふ話であつた、それで如何にも困つて居りました所が丁度動物虐待防止會の會長が、それならば宜しいと云ふので其の子供に馬に被せる毛布のやうなものを着せて子供と雖も動物であらうから動物を保護することを許されて居る我が動物虐待防止會は此の子供も一の動物として保護するに於て差支なからうと云ふことで無理々々と引取つてそれを育てたと云ふことであります、それが動機となつて其の翌年即ち前に申した一千八百七十五年に紐育に動物虐待防止會と別に兒童虐待防止會と云ふものが出来上りそれが非常の賛成を得まして、合衆國並に加奈陀等に擧まつたのであります。

其の後一千八百八十三年即ち我が明治十八年に英國に移ることになつた、是は最初英國の或る人が亞米利加に行つて亞米利加の兒童虐待防止會のこゝとを調べて參りリバブルに於て初めて其の會を起したのであるが間も無く倫敦にも擴まり、倫敦に參りましてからは有名なるロースベリ卿が非常に熱心に此の會に盡力せられて英吉利に於て第一に常に此の事が擴まつた、所が英吉利に於て第一に困難であつたのは、皆さんも御承知の通り英吉利と云ふ國は家族即ち自分の家は城廓であると云ふ考で、自分の家には何人も外からして侵入することを許さぬと云ふのが英吉利の國風であります、家族々々が自分の城と心得て居りますので、其の代り自分が外國に移つて行けば自分の勝手に城を移して行くのであるから極めて便利なる所もあります、兎に角英吉利の家族生活は嚴重なもので他の人が其の内部の事に啄を容れさせない、然るに兒童虐待防止會は或る家で以て其の内の子供が慘酷な目に遭ふと云ふと第三者即ち他の人が行つて啄を容れるのであるから家族城廓主義には反對をす

る、それでナカノ、困難であつた、所がロースベリ卿などの盡力に依て法律を出すことに致しまして一千八百九十四年即ち我が明治二十九年遂に法律案として他人の兒童と雖も是が慘酷に取扱はるゝ場合には引取つても宜しい又それを罰し得る法律が出来上がったのであります翌年の一千八百九十五年即ち明治三十年になつて遂に兒童虐待防止會と云ふものが正式に成り立ちましてそれから非常なる勢を以て廣まつて居る英吉利のやり方に致しますと云ふと、都會の土地でありますれば十万人の人口のある所を一のデストリフト即ち區とする其區の内にインスペクトルを置く、インスペクトルと云と視學官でありますが是は文字通り言へば巡視であります、一人の巡視を置くさうして視て廻つて兒童を慘酷に取扱ふ家が無いかと云ふことを注意して居る、田舎に行くと人家が疎であつて從つて人口が稀薄でありますから先づ八万人の住民のある處を一の區と致して一人の巡視を置く斯ふ云ふ工合に全國を通じて兒童虐待防止會の行政機關のやうなものが出来てしまつた、さう

して中央には夫れく役員を置き、又地方に於ては支部を置いて全國を一の政府の如くに造りまして兒童の虐待を防ぐことにして居るのであります。其の法律に據るとナカク嚴しいのであります。兒童を虐待した者に對しては随分澤山な罰金を課す、例へば一千五百圓以下の罰金を課す、若し罰金を拂はなければ二ヶ年以内の懲役を課すと云ふ様な極りぬるのであります。而して英吉利に於ける兒童虐待防止會の主なる仕事は一方に於て虐待せられて居る兒童を探し出すことである探し出してからはどうするかと云へば、若し其の兒童が生命も危いと云ふやうな虐待の仕方にと遭つて居るならば一時引取つて安全な場所に置く併しそれは假りのことでありまして、正當の手續としては先づ兒童の父兄に忠告するのであります。それは極つた所の書式がありまして其の中には、私共はチャンと法律で許されたる權限に依て兒童を保護して居るのであるから貴下が若し亂暴なことを續けなざると云ふと罰に御合ひ爲さる、それだからして今の中に御止めなさいと云ふ書面を送る、尙

は止めぬ時には愈々裁判所に訴へるのであります。訴へると裁判所の判決に依て虐待した者は重ければ罰を受け、兒童は相當の設備の下に引取られて教育を受けると云ふのが大體英吉利の兒童虐待防止會の組織であります。併し私は英吉利の兒童虐待防止會の仕事は視る機會が無かつたのであります。が獨逸に居ります際に一つの學校を觀た其の學校は前申上げましたやうな兒童虐待防止會の設立にかゝるのであります。伯林の近所にあつたのであります。英吉利の兒童虐待防止會は主として虐待せられて居る兒童を發見してそれを官廳に告げてやると云ふ仲介をするのが主であります。獨逸にありましては其の媒介者となるよりは自分で以て虐待せられて居る兒童を引取るのが主である、是はどう云ふ所から來て居るか云ふと獨逸ではまだ英吉利のやうな慈善事業が發達して居りませぬ、或は不良少年とか或は學校を怠る者等の爲めに特別の設備が出來て居らないので、或る一二の有志者がそれ／＼特殊の團體を造つてさう云ふ保護をして居るのであるからして獨逸では自分

で以て引取るより外途がないのである、或る獨逸の兒童虐待防止會の記録に據ると、其の會で爲て居ることが三つある三つと云ふのは

第一 何處にどう云ふ兒童が虐待せられてあるかと云ふことを知ること
第二 諸方からさう云ふ通知が來た場合に於てそれを調べること

第三 其調べの結果愈々救はねばならぬものであるならば其れを救つてやること

此の三つの仕事に分て居りますそれに付て二つの例を擧げて居るのであります第一どんな種類の兒童が虐待者と看做さるかと云ふと英國も獨逸も似たやうなことであります第一は亂暴すること、殴るとか苛めることである、それは言ふまでもなく兒童虐待である第二はそれと少し違ひまして無暗に兒童を使ひ立てをすること使ひ立てをするると云ふのは身体が弱いものであるにも拘らず無理に仕事をさせる、或は働かせ過ぎる、或は又小さな者を藝人として舞臺に出して錢を取ると云ふやうなことを虐待の中に籠めて居るさう云ふ事を知

るにはどうしてするかと云ふと、英吉利に於ては是は色々の場合にそれ／＼廣告のやうなことをする、小さな紙に印刷をしまして、兒童虐待防止會の性質を述べて若し斯う云ふものが目付かつたならば知らして呉れと云ふことを諸方に配ばる、併し獨逸の方のやり方はさう云ふことはないやうであります、寧ろ獨逸の方では之を人に頼む、どう云ふ人に頼むかと言へば最も多く小學校教育に従事して居る學校の校長及び教師、或は又地方の有志家にも頼み又警察とも連絡を取つて居りまして巡查が直接に通知して呉れることもあるさう云ふ風に於て知らして來る、其の知らして來た時に虐待防止會の本部には掛りの人を置きましてそれを調べにやり、調べに行くにはどうするかと云ふと直接に行つても分からぬ隠す虞がありますから第一に近所の人に様子を聞いて見る、之も多くの場合に於て近所の人には遠慮して正確なることを言つて呉れないそれで色々苦心をして小學校の教師に聞いたり或は又其の地方を擔任して居る巡查に聞いたりして調べる、其の調べた結果如何にも不幸

なる状態に居ると云ふ場合には或は理由を父兄に説聞かして受取ることもある若しそれが許されないとか、不承知を唱へる場合には警察の力で以てそれを引取るそうして學校に入れる其の入れて居る學校は有志の寄附で以て出来て居るのであるが随分立派なものでありまして其の中にはチャンと教師が住んで居る又それに色々の補助員があつて色々の學科も教へて同時に色々の仕事を教へてそれ等の子供達が後に世に立つて行けるやうにする一体どう云ふ種類の子供であるか或はどう云ふ種類の家庭の兒童が虐待の目に遭ふかと云ふをそれも色々あります、是は容易に皆さんも想像の出来ずやうに金のない人即ち貧乏者に多い茲に掲げてある例に依ると或る時何だか咳をする子供が牛乳を配達をして居る變だと思ふてそれを調べて見た所が阿母さんがやはり心臓が痛んで居る其の子供も心臓が悪かつたのであります母は尙更心臓病が重つたから母が極めて居つた牛乳の配達をせぬと一ヶ月六マの賃金が取れないそれが取れないから子供を使つたと云ふのがある貧乏と云ふ

處から自然兒童を虐待するやうになつたと云ふやうなことである其他さう云ふ風に色々例が擧つて居るのであります或る時に七才になる子供が慘酷に非常に叱られて居ると云ふことを聞き付けて其の脇に聞いて居た所が其の子供が自分の弟の飲む爲めの牛乳を飲んで仕舞つた其の家は非常に貧困な家であるから更に其の牛乳を買つてやることは出来ない其の不都合を責める爲に親が慘酷なる取扱をしたと云ふ場合もあると云うやうなことを書いてあります要するに貧乏と云ふことは兒童虐待の起る一の原因である其他父親が飲酒家であるとか母親がしたらが無いか其他繼母繼父と云ふやうな事情の下に兒童虐待と云ふことが起り易い殊に私生兒是は二つに分けてある正當の結婚に依らざる兒童と正當の手續を経る前に出来た兒童とは慘酷なる取扱を受け勝ちのものであると云ふことであります要するに色々の事情の下に兒童虐待と云ふことが行はれて而も其の数は精しく調べて見れば調べる程多いので年々にさう云ふ風に殖へて來ると云ふやうなことを言つて居ります。

是等の児童を受取つた上は何う云ふ保護をするかと云ふと女の兒であれば其の學校を出て女中奉公をするのでありますそれには女中になるに必要なことを能く教へて出すと云ふやうな仕組に出來て居るのであります其の外に女中になりませんにも相當に洋服も造つてやらなければならぬそれを造ることも出來ないもの、爲めに児童虐待防止會で以て一時金を貸して衣物を造らす後に段々月給の中から割引いて返へすと云ふやうな仕組もあります若し男の兒なれば學校を出て職業を得なければならぬから靴作りを教へるとか簡單な指物を教へるとか万事児童が世に立つて行けるやうな方法が講ぜられて居るさう云ふ仕組に出來て居るのであります斯う云ふ風に児童保護と云ふことは彼の地に於て盛に行はれて居るのであります児童保護の上に尙ほ少年者保護と云ふやうなものもある児童と云ふ方は重に十二三才或は大さくなつても十四五位ひが極限でありませうが少年者……青年と言ひませうか少年少女の時期であります其の時期の者に對しては色々の保護の方法が出來て居る

其の他女中の保護の會も出來て居りますので何れも博愛慈善の精神に基いたものであります。前申した通り若しも動物が保護せらるゝだけの理由を以て居るならば人間が保護せられないと云ふのは理に合はない、理窟を言へば道理に合はない是は日本に於ても將來是非發達せねばならぬ又發達することであらふと思ふ尤もさう云ふことは日本に必要はないと云ふかも知れぬ、何故必要がないかと云へば日本の人は大變に情愛が厚いから父親はどうか知らぬが少くとも母親は子供を非常に大事にするやうにありませうからして母親が子供を大事に育て呉れるならば児童の虐待は多くの場合に免れる事實さう云ふ風に圓滿に行つて居るならば日本には児童虐待防止會はなくとも宜いか知らぬが併ながら精しく調べて見るならば日本と雖もが決して虐待されて居る児童が無いとは限らないと思ふ況や色々の事情で以て眞の親が育つて居らぬ者に依つては眞の保護の必要があること、思ふのである。元來人間は殊に婦人は感情の強いものであると云ふことは下田君の御話にもあつたので

ありませんがやはり日本でも動物虐待があつて兒童虐待が無いと云ふことは必要がないと云ふ理窟から來たのではないのであつてやはり感情の表れの一つであらふと思ふ感情は其の性質上理窟を問はず表はれて來るから犬の怪我をして居るのを見て非常に可哀想だと思ふ人或は自分の家に飼つて居る猫が病氣して居るとそれを心配する人も女中に對しては手荒くする慘酷であると云ふのは人間は理窟のみで無くして感情が表はれて來易いから動物に對して同情が起つたからと云つて必ずしも他の場合に何時も同情が起るとは限らない慈悲心の厚い人ならばそれは我々は用心をしなければならぬ或る場合に冷酷なことがある他の人には親切なれども家庭に於ては其の反對のもあるのである是が感情の特質である動物に對して表はれたる同情が兒童に對して表はれないと云ふことは一は感情の性質で一つは或る外國の眞似をしたのであらふと思ふ理窟を言へばどうしても兒童虐待防止會の方が早く行かなければならぬ又其の方が重くなければならぬ動物の虐待を防止するのは宜しいか

其の方の側の發達も希望するがそれ以上に兒童虐待防止會をすべきものであらふと思ふ今日はその参考として外國に於ける兒童虐待防止會の大略を御話したのであります。

子供と談話

後藤ちとせ

夕餉すませて寢床に就いた幼児が添ひ寢の祖母の眠へと云ふのに、やい桃太郎のお譚をさあ舌切雀の續きをと毎日毎夜同じ譚を繰りかへさして喜び眠るのはよく見る所、私共もみんな斯様な時代を経過して來た事と存じます、元來人は社交的のものとや初生兒の折から既に自己の思想を發表し様とする衝動を持つて居ります單に思ひを發表するといふ丈に止まらず他人に了解し得らるゝ方法で之を表はさうといたして居ります、けれども極く幼少な時分には物もおぼえず言葉も知らず言語發達に必要な身体の諸機關も未だ十分には發育いたして居りませんから嬉しとは笑ひ苦しとは悶え空腹になつたとては泣き出すが如き至極簡

單な音聲身振等にて表情するに止まりませんが追々
 心身の發育して發聲器械は發達し四圍の事物の觀
 念も増し思想界が廣くなつて來ると共に周圍の人
 々が使用して居る言葉の數々を聞き覚え一度其便
 利さを味ふ様になりますとさあ他の言葉をも覚え
 込まうと八方から種々の言語を捉へて來て記憶す
 るに従つて試用するはしこさは實に驚く許りにな
 りますので六歳に至つて千五百語を知つたと云ふ
 幼兒さへあると聞いて居りますので西洋の諺にも幼
 兒等が母の膝下で學ぶ事は他日大學校で學ぶより
 も多大であるとか申す言葉があります更に我國
 では子供に脆い祖父父母が同居いたして居る場合
 多いので幼兒等は常に慈愛の籠つた老人よりの教
 育をうけることが出來其間種々の談話を聞くこと
 に事物の道理扱ては世間の道德的觀念勸善懲惡
 の思想を得る事甚だ多く忠臣愛國の情祖先を崇拜
 するの念等は已に此間に吹き込まれて外國人の不
 思議とまで思ひなせる大和魂を築き上げる基礎と
 なるので御座います幼稚園幼兒等は方に此言語收
 得を渴望する時代にありまますので話す事を好くと

同時に人より話を聞く事も大層喜ぶ事です志言語
 の發達は思想發達と多大な關係のあるもので御座
 いますから例の施行規則第二百條にも
 談話は有益にして興味ある事實及び寓言通常
 の天然物及加工品等につきて之を爲し徳性を
 涵養し注意觀察の力を養ひ兼ねて發音を正しく
 し言語を練習せんことを要す
 とありまして保育事項中缺くべからざるものとし
 てあります
 談話の價値
 談話には保母が話して聞かすのと保母の間に應じ
 て幼兒が主として話すのと二種類あります第一の
 方は談話に於ける聞き方の練習即ち他人の言語を
 了解するの練習となり第二の方は話し方の練習即
 ち幼兒等が自己の思想を發表するの練習となるの
 で此兩練習の間に幼兒等は發育も正しくなれば言
 語も發達する且つ又談話に用ひらるゝ材料即ち話
 題の如何によつて知識を増し思想を廣くし想像力
 を養ひ同情心を強くし愛らしき幾多の教訓を直覺
 して知らず識らず道徳心を強くし小さき頭腦に清

き理想を描く様になるのです近く例を桃太郎の昔譚にとりまするならば桃太郎の誕生及び其生育の様子を聞いては老嫗老爺が生育の恩に父祖母父母の慈愛を思ひ桃太郎從順の良性に倣はんことを望ましむべく其が鬼ヶ島への出發譚には桃太郎が勇氣義俠壯圖に感じ犬猿雉に關する庶物上の知識を明確にすると共に彼等が忠節なる働さ振りや桃太郎動物愛護の情を嘉すべく渡航征伐凱旋には進取奮闘遠征の壯快なるを喜ばしめ己れ等も亦斯の如き温良にして而も勇壯なる男兒たらむ事を望むに至るべく其間屢かこる庶物話にて動植物に關する既知の觀念を明かにし同話數回の復習に依り幼兒が話し方の練習をなすを得る等保母の手並の如何によりては幼兒をして喜悅快樂談笑の間に智徳兩育上少からぬ効果を收め得る事で御座います

談話材料の選び方

扱て斯く保育上有益な談話も其材料の如何に依つて其効果に差違あるは勿論却つて有害な結果を來すことがありますから其の選擇に注意せねばなりません。ところで學齡前の幼兒等に話して聞かす

譚には偶言あり童話あり史譚あり神話あり新作の御伽噺あり事實談話あり自然物又は人工品に關したるものあり幼兒各自の經驗が話題にのぼる事もありますが其中にも教訓的のもあり諷刺的のもあり知識を興ふるを旨とせるもあり無害にして唯幼兒の嗜好に適ひ興味を感ぜしむる丈のものもあつて宜しう御座いませう唯聞かして悪いと思はるゝのは

殺伐殘忍な話
 惡漢の成功した話
 復讐怨恨に關した話
 悲觀的思想を表はした話
 繼母のまゝ子いぢめの話
 其他人世暗黒の裏面を表はした話
 惡事の實例

等非教育的のものを避くべく且つ又

幼兒思想の發達程度に適合せざる六ヶ敷さ

大人に興わりても幼兒等に何等の愉快を感ぜざる話

等は採用せぬが宜しう御座います但し談話の材料も難なものを澤山に用ひますよりは精選した物を十分了解させる方が却つて有益で御座います

談話練習のしかた

言語の練習に聞き方話し方の兩様ある事は既に御話し致しましたが今此兩練習をさせるにつき注意すべき事柄をお話し致すことにします

(一) 聞き方の練習につきて

聞き方即ち人の話を聞きとつて能く其意味を理解するの練習は主として保姆の談話を聞かしむるにありませす之をなすに當り保育者の注意すべき條項は

(第一) 保育者の用ふべき言語につきて

(イ) 音調言語共に授業めかず演説らしからず講話らしからず至極自然で丁度母親が子供に祖父母が孫に昔話をするが如くあり

たきこと

(ロ) 言葉は明瞭で簡單で事柄の順序正しく混雜せず單純なる幼兒の腦裏によく收得し得らるゝ様注意すべきこと

(ハ) 親密にして而も野卑に流れず常に幼兒の模範語となるべき言語を用ふべきこと
(ニ) 幼兒等が了解に苦しむ抽象的の語漢語等を用ひざることに注意し平易にして了解し易き語を用ふべきこと

(ホ) 言語調に抑揚頓挫あるべきこと

御話の進行の工合其内容の如何に依つて言葉にも相應な抑揚をつけ音聲の上げ下げ語勢の緩急話全体の波瀾等を考へて變化を好む幼兒をして聞くに倦ましむる事のない様に注意すべきは文を作るの際讀者をして讀むに従つて興を添へしむる様つとむべきと同様です例へば羅生門の諷刺に於て渡邊の綱が荒鬼と戦ふ所などは語勢烈しく音聲強く綱奮戦の有様を目に見る様に勢つたて話すべく鬼が乳母に紛して綱に面會を求むる所などは兩者の對話如何にもしんみりと懐しげに語るが如きで御座います而し是は幼兒の感情養成を主とした談話材料の時の事で庶物話其他

(一) 新しき言葉をつかふ時の注意

物事の了解を主として理科的の御話の際には言葉緩かに順序正しくしつとりと平調に話す方がよくわかる様で御座います。新しき言葉をつかふ時の注意。幼兒等は實物を知つて居て其名を知らぬ事があります、又名をのみ記憶して其實物の觀念の如何にもぼんやりして居る事もあります更に又名をも實物をも知らぬ場合も澤山あります、而し何れの場合にも其實物の觀念を明了にし同時に其名稱をも明かに記憶さすべきで實物を知つた上は其名を覚えることが早う御座いますけれども實物を示さず其名のみを話した場合は大抵あとかたも無く忘れてしまふが常で御座います扱て斯くして新しき物新しき名を話しましても幼兒に決して其記憶を命じ忘却を責めてはいけません元來子供が母の膝下で種々の言葉をお覺ますのは母より故意的に教へられ復習されるのでなく大抵は所謂聞き覺るので一

(ト) 談話中に由て來る對話の取扱ひ方

一度聞いては漠然ふばえ二度聞いては其れかと知り三度聞いては實物を思ひ出すと云ふ様にして終には明かに記憶し自由に其語を使用するに至るのです幼稚園にあつては此自然の方法に依り幾回となく繰り返すうちに自然おぼえさすと云ふ様にしなければなりません。是れ小學校の教授と大に趣を異にして居る所です。但し以上は物の名に就いて御話したので御座いますけれども單に名詞にのみは限りません凡ての言葉皆此聞き覺えの方法でだん／＼敷多く知つて來る様いたすべからず強て覺えさすと云ふ事は例の遊びを以て教育するといふ保育の主義に適はぬわけ御座います。談話中に由て來る對話の取扱ひ方。例へば鬼と龜との話の場、「鬼が斯く斯く申しましたら龜は云云と返事しました」と云ふ様に「申シマシテ」返事シマシテ「龜ガ鬼ガといふ地の言葉を長い會話

へ長々とくたぐた敷言ひ入れますと一体の語勢が緩るんで對話が生きて聞えませぬ故談話中の對話には成可く地の文を挿ます而其話し振りの工合により能く甲乙兩者の對話たる事を承知させる様に話さねばなりません

(第二) 談話内容につきての注意

談話の形式ともいふべき言語につきての注意條項はまづ右できりわけて次ぎには其内容なる御話其物の取扱ひ方につきて述べること致しませう

(イ) 長き談話材料は幼兒の年齢譚の段落等を考へ之を適當なる敷段に分ち各段を一つの話として話し聞かしむること例へば

桃太郎の噺をば四段に分ち始の時間には其誕生及び生育の様を次ぎには鬼が島への出立及び道中を次ぎに征伐の模様と最後に凱旋の段を話すが如く致すのです

(ロ) 談話の内容を明かに了解せしめ且つ興味を添へ感じを深くするために實物標本繪

(一) 動植物を中心とした童話訓話御伽噺等には之等に關する庶物話を伴はしむること

例へば猿蟹合戦を話題とせん折猿蟹其物の觀念を明了ならしむるが如し

(二) 談話内容中幼兒の想像し考察し得らるる箇處は保姆之を話し盡さず幼兒をして考へしむるを可とす

談話中の人物其他の性格はよく之を發表して幼兒をして同情心を起さしむべきこと例へば牛若丸の譚をなすにあたり常盤、牛若、辨慶等の性情自ら談話の中に表顯して幼兒をして能く此三者の境遇に同情し其性行の美なる點に敬服せしむるが如し

(ホ) 談話内容の難易と幼兒年齢の如何に注意

し其了解に苦しましむべからざること同一の談話材料にても或は敷衍し或は簡略にして年齢異なる幼兒に話し聞かすことあるべきこと但し此際には如何なる點を

敷衍すべきか如何なる部分を略すべきかを考へて其話の主眼たり目的たる主意を忘れぬ様にしなければなりません

(ト) 形容のしかた

抽象的の形容は幼児にはあまり効験がありません。花ちゃんとは美ちゃんとは大層仲よしで御座いましたと云つてしまひます。よりは其仲よく遊んで居た事實を捉へて來て幼稚園の行き歸りも必ず一緒に連れ立ちしこと、一つの物も二人で分ちし事。花ちゃんやんが轉んだ時には美ちゃんやんが能く介抱してやつた事、裏の栗をも二人で拾うたと云ふ様に話す方が宜しく、其野原は至つて綺麗な處でしたといふよりは花咲き鳥なき蝶舞ひ雲さまよふと云ふ様に事柄を話した方が宜しう御座います。而して話の全体を悉く此筆法で敷衍し形容して行きました日には冗長に流れて却つて興味を殺ぎますから豫め事の輕重を考へ主要な點には十分力を入れて形容も

し敷衍もして話すべく比較的輕き部分は簡略に致すが宜しう御座いませう

(チ) 表情と態度

談話の際に於ける保育者の態度は落ちて居て居る物に動せず而も機敏で能く幼児の心的状態を觀破し得るが宜しくありませう。物靜かに昔話をして居る際に幼児の裾に毛虫等の附いて居るのを見出す事もありませう。突然異様な參觀人の入つて來る事もあり又は往來にとん／＼樂隊がやつて來る音の盛に聞える事もありませう。其都度幼児は直ちに注意を亂され易くわりますから保育者が餘程心が落ち着いて居て甘く之をひきまゝとめて行かなければなりません。談話に興味をつけるため且つ了解を助けるために態度様子等により所謂表情を上手にやるのは望ましい事です。御座いませうが事々しく全身を打動かして身振り手似真を致すのは滑稽でいけません。此種の動作は成る可く手輕で而も十分

表情し得る方法を用ひる様いたしたいも
のです』

幼稚園に於ける 幼児保育の實際

某 女 史

是は某幼稚園に於ける最少幼児一組を担任せる
某氏が一年間の受持幼児保育状態を概括して記
述したるものにて實際家の参考ともならんかと
茲に掲載することとせり。尚本篇完結の上は順
次二の組一の組等年長者の保育状態をも掲載す
る豫定なり。

一 幼 児 幼児四十名内男児二十名女児二十名

二 保育事項の時間配當

最初入園の日より三日間は唯子供を部屋に入れ思
ふがせゝに席を與へ話をしたり見たり名前を聞いて
見たり時には六球、積木を貸し繪を見せて遊ばし
めまた、子供の知れる唱歌を唱はしめなどして兎
に角幼稚園に馴れしめんことをつとめたり。また

それと共に附添を離さしむる様仕向けたり。土産
としてはつなぎ方の先に圓形の蝶をつけしもの、
たゝみし帆掛船、豆細工、の魚などを與へたり。

明治四十一年四月十三日より

| 時 曜 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 九時 分より | 會 集 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 九時十 分より | 内 遊 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 九時廿 分より | 外 遊 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 十時 分より | 積 木 | 談 話 | 書 方 | 積 木 | 六 球 | 摺 紙 |
| 十時十五 分より | 外 遊 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 十一時 分より | 食 事 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 十一時 十分より | 支 度 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 十二時 十分より | 支 度 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |

唱歌は別に時間を定めず其時々子供に知れる
ものをうたはしめたり

明治四十一年四月二十七日より

| 時 曜 | 月 |
|------------|--------|
| 九時 分より | 會 集 |
| 九時十 分迄 | 内 遊 |
| 十時 分より | 外 遊 |
| 十時 十五分 | 積 木 |
| 十一時 分より | 外 遊 |
| 十一時 十分 | 食 事 |
| 十二時 十分 | 支 度 |

明治四十一年七月一日より八時始業午前十一時

| 土 | 金 | 木 | 水 | 火 | 月 | 曜時 |
|----|----|----|----|----|----|------------------|
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 會集 | 八時卅分より 九時四十分迄 |
| 唱歌 | 内遊 | 唱歌 | 内遊 | 唱歌 | 内遊 | 自九時四十分至 十時四十分 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 外遊 | 自十時四十分至 十一時 |
| 摺紙 | 畫方 | 積木 | 談話 | 畫方 | 積木 | 自十一時至 十二時 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 外遊 | 自十二時至 一時 |
| 支度 | 歸り | 同 | 同 | 同 | 食事 | |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 支度 | |

明治四十一年五月十六日より
(但し五月十六日より午前八時半始業午後零時半終業)

| 土 | 金 | 木 | 水 | 火 | 曜時 |
|----|----|----|----|----|----|
| 同 | 同 | 同 | 同 | 會集 | |
| 外遊 | 内遊 | 外遊 | 内遊 | 外遊 | |
| 唱歌 | 外遊 | 唱歌 | 外遊 | 唱歌 | |
| 摺紙 | 畫方 | 積木 | 談話 | 畫方 | |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | |
| 支度 | 歸り | 同 | 同 | 同 | |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同時 | |

| 月 | 曜時 |
|----|-----------|
| 會集 | 自九時至十一時半 |
| 内遊 | 自十時卅分至十一時 |
| 外遊 | 自十一時至十二時 |
| 畫方 | 自十一時至一時 |
| 外遊 | 自一時至一時 |
| 食事 | 自一時至一時 |
| 支度 | 自一時至一時 |

自明治四十一年十月廿六日至同十二月廿四日
すべて全前にして金曜日の畫方を畫方と板排と
を隔週交互になしたと
自明治四十二年一月十一日至全三月廿日

| 土 | 金 | 木 | 水 | 火 | 月 | 曜時 |
|----|----|----|----|----|----|------------------|
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 會集 | 自八時卅分 至九時四十分 |
| 唱歌 | 内遊 | 唱歌 | 内遊 | 唱歌 | 内遊 | 自九時四十分至 十時四十分 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 外遊 | 自十時四十分至 十一時 |
| 摺紙 | 畫方 | 積木 | 談話 | 畫方 | 積木 | 自十一時至 十二時 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 外遊 | 自十二時至 一時 |
| 支度 | 歸り | 同 | 同 | 同 | 食事 | |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 支度 | |

明治四十一年九月十一日より全十月廿四日

終業となるより午前十時卅分より歸り支度をな
よしむ

| | | | | |
|-----|-----|-----|-----|------|
| 土 | 金 | 木 | 水 | 火 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 談話同 | 内遊同 | 唱歌同 | 内遊同 | 唱歌同 |
| 摺紙 | 積木 | 畫方 | 談話 | 板又は環 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 支度 | 歸り | 同 | 同 | 同 |
| | 同 | 同 | 同 | 同 |

土曜日の摺紙にはつなき方豆細工等を混じたり
又積木板排環排等には大抵具を與へ貝排の練習をなしたり

(一) 遊戯 四各課目中保育に用ゐたる事項の題目及順序

(二) 唱歌 蝶、雁、鳩、風車、結んで開いて

蝶、蓮の花、雀の遊び、禮の遊び、渦巻

か

(三) 談話

桃太郎、金ちゃん、兔と龜、兔の片耳、犬の子供を救ひし話、蚊と獅子の相撲、以上の外に其時によりて色々なことを話したり。即ち毎日の躰け方、休暇、行啓、天長節、お正月、紀元節、米鑑隊の歓迎等の話或は四時折々の天候其植物、其

鳩、雀、飛車、みがかずば、桃太郎さん、お正月、紀元せつ、グウドモウニン

昆虫等につきての話をなしたり。また一度の話題は二度乃至四五度も繰り返さるゝものにして復習の時には成る可く子供に話さしむる様になしぬ。

(四) 六球

雀

風車

(五) 積木

(はじめは箱を興へず單に積木のみを興ふ)

正方形四個にて隨意 長方形四個にて隨意

正方形二個長方形二個にて隨意

長方形六個にて隨意 長方形正方形の各三個宛にて隨意

瀛車 腰かけ 瀛車にトンネル

塔 門 軍艦 凱旋門

橋 燈籠

板排

瀛車

門

(六) 板排

瀛車

門

(七) 環排

燈籠

提灯

眼鏡

(八) 摺紙

魚に水

船

雀

蝶

(九) 畫方

山

池

山に旗

山に旗

山に旗

二十四
かりに山(山は)
貝にて付らしむ)

果實 顔 貝をも興ふ

山 山に日
肩かけ(豆細工に人を)
蝶(圓形)
作り其れに着せしむ)
かり

舟に旗
山に日
かだんで

波に舟
梯子
水に魚
其他隨意
魚かば

五保育の方法及成績の大要

西も東も右も左もしらぬ花の如く愛らしき子供の
はじめに家庭を離れて幼稚園の門をぐくりし當時
彼等の感想果して如何、おそろしき所、恥かしい
所、いやなところ、面白いところ等種々ありけん。
斯る子供四十名をわづかりし第一學期の初め如何
にせば宜しきか判らざりき。然し兎に角これ等を
して幼稚園に馴れしむるは第一の急務なりとまづ
其方面につくしぬ。入園當時はたゞ是とて目立ち
しことは勿論なからず。たゞ成可く機嫌よく遊ばし
むると共に附添を離さしむるやうに努めたり。其
席も別に定めず子供の好むところに座せしめ萬事
を宥屈にせずして害なきことは極めて自由にせし
めたり。其子等の家庭にある時のことを考へ合せ
て成可く其れに近き方法を凡てに於て取るやうつ
とめたり。斯くする内子供も次第に馴れて四月十



一日には一人、四月十三日には一人四月十六日に
は一人四月廿七日には七人附添を離すに至り五月
廿六日には凡ての子供全人附添を離れて楽しく遊
ぶに至れり。又入園當時は常に泣きし、某々の三
人も頓がて涙を收めぬ。斯くして四十名は全く幼
稚園のものとなり毎日「楽しく面白く共に遊ぶ
様になりぬ。斯くて夏の休暇前には折角これほど
になりしものを六十日も休みては又もとの通りに
後戻りしはせぬか」といふ心配をする様になり
ぬ。先づ第一學期の成績は好良なりき。九月十一
日幼児登園せしに皆大きくなりし様覺えぬ。きた
休暇前に取越してなせし心配の全く無用に歸せし
様なる有様には全く嬉しかりき。唯某々の三人は
かり少しく泣きしが他は何れも機嫌よく第二學期
の始めを迎へたり、此當時意外に感じたるは
一子供がよく幼稚園に馴れて居ること
一列を作りて歩むことの上手になりしこと
一尾田前川などが以前より能く色々のことを話
す様になりしこと
一唱歌の柏子がおそくなりしこと等なりき。

第二學期に至りては第一學期よりは少しくするらしく物事をなせり。されども子供をして無理にいやなことをなせしむるが如きことは決してなさず飽迄も子供を標準として出來得る限り自由になしたる積りなり。

第三學期に至りて次第に暖くなる頃より幼児の元氣急増して遊ぶことも能く遊びたれども中には随分亂暴を極めしものもありたり。又此頃より男女別々となり男兒は其勢力を逞くし女兒をば顧みざるに至れり。外遊等にあつて自然に分るは宜しけれど其他のことにありては何事も共にせしむること必要なれば其方面に心せり。二月十五日始めて子供の席を定めたり。其時も別に拒むものとはなかりしが其後風邪麻疹等のために缺席者多く机を一つ又は二つに纏めしたため定めたる通りには進行すること能はざりき。

一 始業前

一年間を通じて別に之と云ふ出來事もなく樂しく暮し面白く過して保育の成績もまづ悪き方にもあるまじ尙以下各項につきて少しく述べん。

子供の來る迄に室内を清潔にして其日の保育に差支なき様に準備す。頓がて一人二人三人四人ぼつりくとお辨當さげて部屋に入り來る。先生オハヨーと挨拶してはや膝に倚り掛りて遊ぶ。大抵は部屋にて遊ぶ。天気よき時は外にても遊ぶ。故に監監者は室内と室外とに要しぬ。

二 會集

チリン／＼こゝにもかしこにもバタ／＼と駆け來る小ざき靴音賑はし鋤もしやもぢも又の時を期して收められ互に劣らじと席につく頓がて樂器に合せて會集に行く。此時氣も心も新らし。頓がて一の組を始め三の組に至る迄一人の指導の下に歌ひ舞ふ紅葉の如き手を差し上げて「蝶々」と餘念なきも實に愛らし。

三の組にありては入園當時二三日は此處に臨むこと能はず。唯己が部屋の中にありしが暫くして參觀に出かけぬ。いつにならばあの中に入りて共に出來るか他の組を羨ましく思ひ居たりしもやがて小ざき四十名も其中に入ることを得て嬉しかりき。會集の時には此組自身のみの内遊の時よりも

きれいなすはふもしろし。

(三) 出席調べ、躑け方

會集終りて内遊することもあり、又部屋に入ることもあり、朝の出席調べの時には行儀を正しくして其名前を呼ばしものは「ハイ」と答へしむ。大抵はよく返事すれども某々の二人は何うしても返事せず「甲さん」と呼べはニツコリと笑ひ「乙さん」と呼べば下を向くか然なくば知らぬ顔す。出席者を調ぶるに初めは出席簿の順に帖面を見て其名を呼びしが其後には出席者のみを片端より呼びて早く正しく返事せしむる様になせり。其時には正しく足を揃へ手を膝の上に置かしむるやうになせり。出席調べのあとには大抵躑け方の話をなす。今迄に云ひ聞かせしことは

朝先生に「オハヨウ」といふこと

朝家を出づる時及訪ひしときに挨拶すること

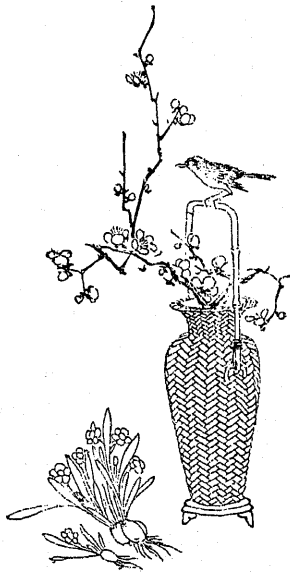
食事の心得

杓子はかたづけること(砂遊用玩具)

少し位の事に泣かぬこと

泥靴を能く拭ふこと

成る可く自身のこととは自分ですること
雨の降る時は外に分ぬこと
玄關で遊ばぬこと
腰かけをふもちやにりぬこと
部屋の中や廊下等を静かに歩むこと
等なり、大抵よく聞きしも濱野某は時々雨の中を走り廻りたり。腰掛をふもちやにせぬやうにするには一寸骨折れたり。



玩具研究に就て

和田 實

幼児教育上玩具の忽に出来ないことは識者の夙に入笠しく云つて居る所で今更我々の喋々を俟たないで判り切つて居ることではあるが然らば如何に之に充分な解答を與へる人は先づない様になつて吾人は所謂世の名士が口や筆の先で玩具に關する種々の注文を出すのを見た。時々は某種の玩具に對する批評談なども聞いた。其論評なども見た。併し何れも斷片的感想談か然らざれば好事的骨董談が主となつて居るので玩具の歴史の盛衰や地方的狀況などに就いては如何にも詳しいものであるが、吾人の當の目的として居る幼児教育其物には然したる參考にもならず、之に因つて母親が如何なる玩具を我子に與へ様かと云ふ目安を得ると云ふことには餘り役に立たぬ様である。吾人は世の名士や識者に依頼して早く完全なる玩具の

研究の成らんことを獨望して居るのであるが未だ有り難いと感じた程の指導者に遭遇することが出来ないのは如何にも遺憾のことである。然るに吾人の傍には常々幾十の幼児が居る。日々おもちゃや／＼とせがまれてあれか是れかと考へる餘裕もなく供給しなければならぬ様な次第である。是に於てか玩具の教育的研究と云ふことは最も痛切に其必要を感じて居る。此機を利用して玩具を研究することは最も便利なことである。然るに多少の効果のないことはあるまいと考へて組織したのが本會玩具研究部である。然れば本會の玩具研究は其目的とする所は實際の教育に少しも貢獻することである。従つて何歳位の子供には如何なる玩具が最も有用であるかと云ふことは吾人が研究の當の目的である。是に就いては吾人固より多少の意見を以て居る。併し吾人の經驗は極めて狭き範圍に於ての研究であるから是が果して一般の兒童に適するか何うかは廣く實行して見なければ判らぬ。是に於てか吾人の玩具の研究に同情せられて吾人と共に其實験的方法

面を贊助せらるゝ人士を求むるの必要を生じた。是等の事情が本になつて彼玩具研究部賛助員と云ふものを募集し、廣く吾人の意見を實行する機会を作らうと云ふことに運んだ次第である。聞く所に因ると歐米に於ては夙に玩具配布組合が成立して居つて中々大仕掛で遣つて居るやうである。成る程單に配布と云ふ例から見ても父兄の心勞を省くことは非常で然も年齒の成長と共に統一したる玩具を與へることが出来るから此仕事でも獨立した立派な事業と云ふことが出来るだらうと思ふ。本會の玩具配布が行く／＼發達して歐米の夫れの様になるか何うかは疑問であるが然し吾人の研究の効果が着々効を奏すると共に此事業も漸々發達するに違ひないと信じて目下努力して居る次第である。餘事は兎に角、要する所吾々が玩具研究に努力する當の目的は第一に現在世に賣られて居る玩具を研究して果して何れ程のものが教育的効力を有するかと云ふことを研究して幼兒教育上に統一したる玩具の理想を建て第二には日々製造家より提出せらるゝ新案玩具を批評して其玩具の教育

的價值及び使用より兒童の範圍等を明示し、第三には進んで規在缺乏せる玩具を考案し以て益々玩具の改善を計らんとするのが主たる目的である。人或は吾人の此計畫を效て其成功を疑ふものがあるかも知れぬ。併し吾人は多少自ら信ずる所がある吾人は吾人の自身の事業を以て決して空想に終るものとは思はぬ。何となれば吾人は他方に於て遊戯研究者である。然も体操家の如き偏局せる遊戯研究者にあらざして幼兒の全遊戯に就いて深き研究を試みつゝあるものである。既に遊戯研究者である。従つて玩具が如何に用ゐらるゝかと云ふことに就いては當然尤も深き觀察を試みつゝあるので玩具に關して抱持せる己が意見が果して正確を得居るや否を檢察するに就いて尠なからぬ便宜を有するからである。斯の如き由來と斯の如き抱負を以て取り掛つた吾人の玩具研究が果して那邊迄發展し得るものかは偏に賛助員諸君の誘導に俟つものが多いだらうと思ふ。世の志を同ふせる士希くは吾人の事業を翼賛せられんことを。

●玩具研究部賛助員への

配布玩具説明

●自三年至四年男兒 玩具研究部員高市次郎

桃太郎、最近に發賣された京都の清水焼で桃太郎が桃から生れやうとするのと翁と媪と三個一組で色の配合から形迄餘程甘く出来てをる。

觀察玩具でふ伽噺の材料に最も適當してゐる情の教育に資する所が多い。之を用ゐるには或は配置をかへ或は箱庭の大きな家の中にかさ或は箱庭中の人物とすることなども面白い。

定價拾壹錢

2. 倒立人形、ブリキ製で高價な舶來物を模造したもので船來其のまゝに出来てをる。動的觀察玩具中の理學的玩具に屬し甘く平均を保ちて徐に前進する處に興味ありて智力を知らずく啓發するものである。

定價貳拾九錢

●自四年至五年男兒

機關砲、之は大阪製でニッケルメッキをした金屬製のもので製作も餘程丈夫である。あづき或は散彈を澤山入れてハンドルを廻せば恰も機

關砲が散彈の雨を降らす如くばらばら弾を出す。手指の練習となると共に模倣遊戲にも用ひられ又觀察上の智識を得ることも少くない。

定價四十錢

●自八年至九年男兒

組木、兩端に凹所を有する二寸計の杉製木片が五十個一組となりたるもので此の兩端の凹所と凹所とを互に嵌み合はせしむれば適宜の直線並に曲線迄作り得て此の線を組み合せて任意の立体物も所り得るものである。例令は机腰掛風車瀛車等自由なものが作らるゝ圖形も數種添つてゐて椅子の作例が入つてゐる。構成的玩具で日本製としては種類の最も少ないものである。手指の練習となると共に工夫想像の精神を養ひ恐ろしげな練習の習慣を付けることが出来る。尤も此の玩具は昨年の春頃から賣り始めたのであるが餘り用ひられなかつたのが此頃識者の注意を惹

定價貳拾貳錢

2. 魚形水雷、パラフキンにて魚の形を作り其の中に火藥を仕込みて下方に重を吊して水中に浮

遊ぶ様に出来て居るこの尾端に火を付けて水中に投ずると恰も魚形水雷が敵艦見掛けて前進する様に前方に音を發して進み其の時追火線が火が傳ふのが見える暫くすると随分大きな音を發して爆發すると魚形も亦破砕して仕舞ふのである。理學的觀察玩具で兼て化學思想を養ひ非常な豫期の注意を以て觀察する處に興味があるのである。

3. 飛雀 ポール製の雀の形を螺旋の仕掛で空中に上げるもので三間位翻々しとて飛び上る。此の玩具は運動を目的としたもので戸外に行ふべきものである。

注意 此の配布玩具は一口貳錢過金 定價七錢

●自四年至五年女兒

針具、西洋から歸つた人の話を聞くにあらでは總ての玩具はうそのものがない例令形は小さく製造は粗であるにせよ實物の供へてゐる形色合などは玩具も亦た供へてる然らざれば兒童は誤つて智識を得ると言はれてゐた日本のは價が安いから仕方はないが此の點が缺てゐる

るものが多い此の針具は糸巻だけ材料も製造も實物と異つてゐるが其の他は材料製造法まで實物と少しも變らない先づ日本製としては價の割合によい方である。模倣遊戯に用ふる好材料にして女兒には大人の想像以外に模倣玩具が歡迎せらるゝ殊に女兒に歡迎せらるゝ家族遊はやがてホーユを主宰する小模型であらう定價拾七錢

2. 舌切雀

自三年至四年男兒の欄にて説明せし「桃太郎」が「舌切雀」に變つたまで、あるから略す此の種類のもは他にも種々ある。定價拾壹錢

3. 活動水族館

浦島太郎だとか蟹の様なものをもつて行くところグネットとの作用でぐるぐる廻る様になつてを其の少し下つた處に段があつてそこに種々の魚類があつてある夫れが圓筒内を廻轉する磁石に感じて靜かに動く別に又磁氣を帯びた釣竿があつて之を魚の處に持つて行くといふ附着力釣りに上げるものが出来る此の玩具は一昨年頃出

来たもので今は店頭に餘り見付つからない。兒童自身で活動せしめ之を観察するものであるから多少手指の練習となると共に理學的現象の觀察物としては興味あるものである是等の印象が多少にても兒童の腦の一限に残り他日磁氣を應用した大發明物の種子ともなれば幸である

定價金拾貳錢

●自五年至六年女兒

1. 針具、前掲

2. 蝶逐自動、

ブリキで作り螺旋仕掛けで自動するもので前二大きな蝶が翅を動かしながら行く其の後から女の兒が之を逐かける様になつてゐる。動的觀察玩具で之も舶來のものを使ねたのである。用ひ方で色々な話の材料にもなり兒女自身で動かして楽しむことも出来る。蝶が人形の大き程もあつて兒童が怪まないのは幼兒が人物の畫をかくとき頭に足を付けてすましてゐると同じ心理作用で主体にのみ注意がまとまり比較統合の心理作用が發達しないからである若し此の玩具をして人形と蝶との實際の比を保たし

めたならば少しも興味はないのであるお驗し下さい若し此の蝶は人形の割合に大きいと言はるゝお兒さんがあつたならば其の方は餘程發達が速かなのである是等が御通知をして戴きたい點である。

定價

●新しき玩具の御紹介

一、蓄音機、大阪で昨年出来たものがあつたが不完全で音が明瞭しなかつたが四月中に平圓盤で餘程よいのができた大聲とは言へないが四間位隔つてゐて充分音を聞き分けることが出来る其の音がいかにも玩具的で一種の興味があつたには「桃太郎」「龜と兒」「はとほつほ」「お月様」樂隊マーチ一其の他俗歌が澤山ある。

定價蓄音機貳圓八拾錢。盤五拾五錢

一、ピアノ、形は全くオルガンで其の音はピアノである是は職人がピアノ音を知らずに作った誤りであると思ふかゝる誤りは時々あるので益々玩具研究の必要を感じるのであるが兎に角出来は餘程甘くて丈夫である音色もよく「見渡せば位は充分弾じられる。(五歳より八歳位迄)

定價七十錢

一、動物の早變り、朴の白木で作つたもので獸類の体に四肢の着いたものが一つと牛獅子猫象兎の頭と尾とが一箱に入つてを一つて胴になつてを二枚の板の間に頭と尾とを挟めば前の五種の動物が出来るのである。而して首尾四肢の各關節が動く様になつてゐる。此の玩具は西洋には以前からあつたが日本で此の種のもので出来たのは初めてである。兒童各自の工夫によりて種々の形に變じ又之を模倣遊戯にも用ひられて高尚な遊戯品である。(六歳より八歳位迄)。

定價三十五錢

一、瀛車、瀛車や電車は随分澤山出来たが粗造なもの許りでも舶來のものとは較べものに甘くない殊にレール付になると始終脱線して甘くないかなかつたが今度出来たレール付の瀛車は色合から齒輪から車輪まで甘く出来て廻轉數も多くなつたが舶來にはまだ及ばざること遠しである併し和製として第一等で稍々満足すべきものである。

定價壹圓五拾錢

一、棒押鈴車

直徑五寸の輪に鈴を二つつけて

之を棒で押すとちりん／＼と鳴る様になつてゐる製作が頑丈で色は赤と緑を配合してを此の時代は原色を用ひて貰ひたいが職人の考案だから注文通りには行かぬ。此の玩具の良いと思ふ點は輪の幅が廣いから押すとき倒れないと云ふこと、鈴を鳴らすに螺旋狀の針金を用ひずして滑脱な取付による重鎮にて鈴を打つ故取れつこのないことである棒押の種類は澤山ありて複雑なる自轉車とかとんぼとか色々なものを取り付けたものが澤山あるが之を用ふる兒童には其の必要がないのである又第一の缺點は押し進まんとするとき直に倒れて用をなさないことであるが此の棒押は是等の缺點を補つてゐる。

(四五歳の兒童。定價貳拾五錢)

注意

右紹介の玩具は四月中に出来たものである。此の外にも新案特許となつたものもあるが餘り賛成の出来ないものは掲載せぬこととした。

此ごろの料理

石井泰次郎

深皿

鳥の子賊
木の芽みそ和へ

鳥賊は、足を取り去り、甲を出し、二つに切りて
開き皮をむき去りてよく洗ひ、幅二三分、長さ一
寸位、たんざくに切り、ざつと鹽湯にて湯煮す
煮立ちたる湯の中に入れて二分間位
竹の子は、小さきものを皮をむき、能く湯煮して
小口より一分厚さに切り、かつを煎汁、醬油、砂
糖等にて下煮をなし置く、
次に、木の芽味噌は、普通の味噌をよく摺りて裏
ごしなし、砂糖、みりん酒、少しの水等を加へて
火にかけて能く煉り、
山椒の芽を、摘みてよく洗ひ、摺鉢に入れて摺り、
右の味噌の中へ入れて交ぜ合し、火よりあろし、
前の鳥賊、竹の子等を入れ、箸にてかさませ、器
の真中へ、山なりにあまり、多くなく、盛るなり、

皿

白酢

竹の子さしみ
木くらげ防風

五寸位の竹の子を、皮をむき丸のまま、蒸籠に入れ
湯鍋の上に向け、柔らかくなる迄蒸すか、又はよ
く湯煮して、三つ位に輪切りになし、穂の方は、
其ま、堅にして一分厚さに薄き切り、下の方(穂
でなき方)はたてに二つ切りにして、端より、薄
く切り並べ置く、
しる酢の拵へ方は、罌粟を、焙燥或は炒り鍋にて、
こげぬ程に炒り、摺鉢に入れて能く攪り、豆
腐のしぼりたるを、けしと同量ほど入れて摺り交
ぜ、鍋に入れて、砂糖、鹽、みりん酒を加へ、火
にかけて能く煉り、酢を入れて混ぜ合し、どろり
とする位にして火よりあろす、
木くらげは、湯煮して、石づきの堅き所を取り、
幾枚も重ねて、端より巻き、堅く押へて細く切る
防風は、洗ひて、こまかに切り、生のまゝ、
皿にしる酢を入れ、其上へ竹の子を体裁よく並
べ入れ、木耳と防風とをのまに付合するなり、
汁 摺流し魚

ひらめ、鯛、其他の脂肪の少なき肉の白き魚を、
骨、皮を去り、肉のみとしてよくたゝき、摺鉢に

入れて摺り、少しの鹽、味淋酒煮切、鯉節煎等を加へて蒲鉾の肉のやうにし、へかまぼこよりは、煎けを多く入れて柔らかになす、味噌に合せ汁に仕立つるなり、味噌の立て方普通にてよし、さて椀に盛りて進むる前に、ちさの葉はつみて水にて洗ひたるを細々に切り、汁の中にかとし、一と煮え煮て椀に盛りてよし、

春の旅行 (續き)

千 歳 子

知らぬ旅路を辿り行く身は關西線の流車の中も何となく不安の念に驅られる様で乗客多き三等室の片隅に小さくなつて腰掛けてると傍に居た尻髪のパイカラ連も向側に煙草ふかす白髪の爺さんも皆此をかしげな旅娘を不思議さうに見て居るのでした、乗せるものは載せ降りる客は下車せしめつ流車は桑名四日市と進み進んで龜岡町を過ぎて後には鈴鹿山脈の山間を縫うて乗客をして坐る深山幽谷の美景に酔はしむるのでした、何時しかと三時も過ぎ四時もゆきやがて奈良市に着くだらうと

思はるゝ午後五時過ぎ、四面縁りなす山又山に圍まれたる一小村に流車は緩かに其が少みを止むるのでした、美くしの村里よ、彼處の峰、此處の川邊なるは如何なる人の住家にや、など僕の想像に驅られて居ると窓近く呼び立つる車掌の聲は「笠置ー、笠置！」と云ふのです、扱ては名にかふ笠置の里かと懐かしやさらば延元帝のゆかしき舊蹟も程遠からじを」と思つた時は、はや手は重きドアを押し開き足はモーブラットホームの上を歩んで開札口に向うて居たのです。流車一聲黄昏の静けさを破つて我をわいて走り去つた煙のほとを見送つてステーション前なる唯一條の村道を進んで行きますと一町許りにして大手橋と記された小やかな橋が見えるのです、笠置町とは此よりさきを云ふのか町に沿うて建てられた家々は金殿玉樓の目ばゆきこそ無けれ、茅葺の軒毎には夕餉炊く籠の煙りも賑はしく行き交ふ人の面影も何となく穏やかに見なされて心地よく町の背後に空高く聳ゆるは數多の舊蹟に包まれたる貴さみ山と云ふのでした。モー六時もすぎたと見えて暮色蒼然霞は

笠置山麓をめぐつて二羽三羽時にいそぐ夕鴉の聲
 無くして雲に入るも衰れ深く云ひ知らぬ静けさ身
 に迫つて樂しき旅の身の譯もなく心淋しくなるの
 でした。嗚呼日暮れた今宵登山は叶ふまじと思
 ひつくと遽かに宿の撰定に苦しむのです。都を出
 づる時「宿は必ず友人の宅に頼めよ決して旅館泊
 りをするではない」と某師の君の呉々の忠告に旅
 の初夜は涼車の中に其後の夜半も友の宅に明かし
 たのに、一時の感興に心動き前後忘れて下車した
 ものゝ宿るべき所なくては如何にかせん、されば
 とて目前に史美をつくせる名所見捨て、空しく奈
 良へ赴かんも憾み多し、日は已に暮れたり定むべ
 き宿は無しと進みもやらば退きも得せず大手橋の
 橋の上に行水を眺めつゝ暫し茫然として居た
 のでした、窮すれば通ずとか兎角するうちふと思
 ひ附いたのはまた例の突飛な考！而し良策であ
 つたのです、夫れは當村の村長、どんな人かは知
 らないけれども兎に角名譽ある地位ある村長に事
 の由を物語て一夜の宿を頼ふといふのでした、是
 れなれば身の安全は請合と喜ぶ折しも何處ともな

く愛らしき子供唄か聞えて來るのです。と見初
 め十二三歳許りの田舎娘の纏れかゝつた黒髪に新ら
 し手拭鉢巻して脊の赤兒を揺動りつゝ餘念もなく
 唱ひ續けて來るのです、此兒を見ると心機一轉
 更に良策が浮び出して來たのです、其れは此兒の
 先生、例令此兒が小學校へ通はぬまでも此村に小
 學校の無い事はあるまい。其校長なる人の宅に頼
 んだなら同じ教育に關する好もて承知して呉れぬ
 事もあるまいとの事でした、で、つと走りよつて、

「ねエちやん此町に小學校があるでせう？」

と云うて見ると「エ」と答へるのです

「校長様の御宅は何處？」

と更に聞くと

「雲井先生のかうちかへ？、アンタ學校の先

生になりに來たのかへ？、
 と田舎言葉も其まゝにあどけなく問ひかけて頻り
 に此身の様子を見守るのです其れにはよきに挨拶
 して雲井氏とやらむの宅をさくと「斯くく」と
 親切に教へて呉れましたから左に行き右に折れ云
 ふがまゝに笠置山麓について行きますと、やがて

木津川の川岸へ出たのです、薄暮にも見渡さる、清き流れの水豊かに岸の火影のうつるのさへ黄金の延金熔し込んだ様なの。今し一般の渡船の此方さして漕ぎよせるのが見えるのです、四五名の村人を乗合に向ふ岸へ着いた時はモ一人の小學兒童に道しるべを頼んで居たのです。雲井氏といふは年のとつた人なこ、其が去人は久しく病床にあつたが此頃丈夫になつたと、一人娘もモ一大きくなつて小學校に奉職中なこ、等此兒に途中で聞いて置いて、扱て小松一本生ひ繁げれる門口より唯一人同氏の宅を訪れたのです、所朴なる同氏の宅は今、夕餉を終へた許りか明障子に燈火うつつて樂しげな話聲もきこえるのです、言づれたら如何な人が出で来るだらう、此をかしげな姿を見たら驚きと疑ひとに願ひ許さぬ事もや」など案じつ

「御免下さいまし」

思ひ切つて云うて見ると「吉田さんが御出でた様だ」と云ふ太やかな聲がして五十恰好の男の方が出て來られたのです、終日旅に疲れた身のどんなにか垢づいからうと思はれるのにズツクの鞆の重

げに肩をこたへて袴の襷も消えたのを穿き餓しげな顔附をして立つて居る、耻しき限りはないが今更どうする事も出来ず名刺とり出して事情を話し「一夜の宿を貸して下さい」と哀願すると雲井氏なる其人は初めの疑ひ漸く消えて「そはまた風流なわさよ、よくこそ拙宅を尋ね來られし、とく入りて休息されよと快く諾はれたので嬉しき抑へがたく泣く子に乳と早速導かれた室に通つて誠籠つた同氏の親切を謝するのでした人を見れば盜賊と思へ」とは誰が教へた言葉でせう一面様もない此身を何かと痛はらるゝ嬉しさに結ばれた心も解けて何よりは先づ夕餉をと差し出された膳のものも心おきなく平らげて、問はれるまゝに旅の様など話して居ると者子と呼ばれる、同氏の夫人も出て來られて「年はいくつ、學屋は？父母は、と兄弟は？故郷はと物珍らしげに問はれるのも思ひかけなき珍客、こんな頓狂な來客は年頃稀れだと思はれるからだと自分ながらも可笑しくつてならなかつたのです丁度隣家に湯がたつて居るから風呂浴びてはとすゝめられたのを幸ひ同氏と共に隣家へ行

つたのです雲井氏の夫妻共に面持氣高く物いひ振
りも上品に殊に氏の態度の悠然としてせまらぬ様
など何とはなしに由緒ある人らしく自然先生く
と云ひわがめられて居たのですが隣家に參つても
先生は「東京から親戚の娘がやつて来たがどうで
すいー娘でせう杯と全るで小兒を扱ふやうにされ
るので幼稚園では相當に大人振つてる自分にもな
んだかモ一小さな小供になつたやうな氣がして云
はる、まゝに浴室に入りますと之れは又都の其れ
とはすつかり違つて五衛門風呂とか云ふのでし
た、彌治北太が足駄穿いて入つたといふのも是れ
だらうに足をやいては大變と用心しながら而し心
地よく入浴も終へ持ち合せた白粉も薄くつけて戸
外に出ると廿日許りの春の日は臍ながら縁深き峰
々を照して笠置の里は今一しは趣を添へ旅の愉
快もまたしみんと身に浸み込むのでした、寛の
水に口漱いで雲井氏の宅へ歸ると夫人は茶菓など
整へて待つて居られたのです、袖ふり合ふも他生
の縁とか斯る處にまよつて來て、思ひかけぬみ心
づくしに遇ふことの末長く忘れられじなど云ひ出

しますと夫人はつくく、此身を見まもられて「造
花ならひに京都へ行つて娘が歸つて居る時なら
どんなに喜んだらう丁度あなた位の年です東京
へも勉強に出たがつたが思ふにまかせず」などい
はれながら寫眞など取り出してもてなされるので
した四方山の話のうち同夫人の若かりし折は藤
堂家に仕へて久しく東京本所の邸内にありし事、
雲井氏の祖先の富豪なりしことなども聞くにつけ
て何となく此家の人の奥ゆかしくどんな人の子孫
だか聞いて見たくなつて來ると隣家で話し込んで
居られた雲井氏が歸つて來られて「モ一九時もす
ぎたから今夜は此御娘の中に昔語りでも聞かして
上げやう、奇美の布團を出してお上げと我兒の様
に痛つて呉れるのです娘さんは奇美子と云はれる
のでした、」



お伽訓話

猫なしの國

是は北京童蒙院保母主任たる加藤貞子氏が清畫中より譯して送られたるものなり茲に掲載して好意を謝す

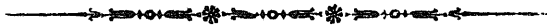
或る田舎（東京近在宜し）からん支那語にては北京の城外としてありますに太郎といふ七ツ位の子がかりました此子は未だ小さい時にお父さんもお母さんも亡くなりましたのでいつも小さい時のきものを着て村中の人の下さる御飯のお残りを貰つて毎日過むして居る可哀相な小供でございました此太郎は皆様のやうに日曜日には何處かへ連れて行て下さるお父様をお母様がないので生れてから一度も東京といふ處へ行たつとがありませぬ唯人の話に日本中で東京よりよい處はない東京は天子様の居らつしやる處で街は美しく賑かで人の通る道の下はすつかり金のかわら敷いてあるといふことをきいて居ましたので何卒一度はそんな處

へ行つて見たいものと思つて居りましたが或る時村の人が東京にゆくといふことを聞き何卒つれて行て下さいと頼みましたがきゝませぬのでそうつと其人の後から分らない様についてゆきましたらやがて賑かな町へ其日の夕方つきました（原文は城の門につきましたとしてあります）は乃ち城内にはいつたことですが日文では云ひようが分りませぬ）見ると前に見たをもない墨塗の馬車だの自轉車だの自動車、電車一つとして驚かないものはありませぬけれども太郎はこんなものを見てゐるよりも早く金の磚のしいてある處に行つて夫れを五つ六つ拾つて村に持ち歸り始終お飯を戴く方になつたり又之をお金ととりかへてお金持になつたものだなんていろ／＼考へながら道を歩いて行きますけれどもちつともそんな處は目付からず泥の道ばかりなので大層心配しはじめました其中に日はもうとつぷりとくれて町の兩側には美しい電氣や瓦斯の光が輝きはじめました見れば町の道は丁度金か銀の様に明かるく見えるので太郎は爰に始めて自分が人の話を信じすぎたことを悟り又そんな

な貴いものは決してたゞ捨つては得られないものだといふことが分りました其内にだん／＼お腹はすいてくるので或る家の門の前に腰をかけて休みながらいろ／＼考へると自分が村に居たときでさへ人のお使や羊や豕の番をしてゐさへすればこんな餓しい思はしたことはなかつたその後悔をしましたは今ほもう歸るには歸れずその上道も分らないのだから此太郎の小さい胸でいろ／＼思案しながら此日本一の東京だから又私の様なものでも使ってくれる人があつかもしれぬ。誰か使ふ人があつたら一生懸命に働いてそして村に歸りませうと固く決心しましたさて太郎はつかれた足もひもじい腹も忘れて主人をさがしにすた／＼とゆきますとやがて大きな立派な家の前に來ましたので太郎は「ごめんなさい」といつて門をあけてはいつてゆくといふ一人のばわやらしい人がで、來て太郎のきものを見るが早い、「この乞食小僧本もよませ、はたらきませずして人に物をもらひに來たか、なまけもの」と大きな聲で申しますので太郎は「いえ私は乞食ではありませせん私は小さい時に父母

に別れました誰か私を學校にやつて下さいませう私は如何な仕事でも致しますどうぞ使て戴けませんでせうかと頼みますと、おばあさんは悲しいかほをして「何をぐづ／＼いつてるんだこんな汚ない子は何處だつて使ふ人はありませんよ、さつさと、かへらないと沸湯をぶつかけるよ」といひますので太郎は口惜しさ悲しさが泣かんばかりになりましたが其家を出て街の木の下に休むと飢と勞れで前後も知らず眠りました。

すると丁度そこを一人の金持が通つて此寒いのにか哀相だと思つて起している／＼聞てみると前のこゝとがすつかり分りましたそこで金持は太郎をつれて家にかへり臺所のお手傳をしました(原文下でつく)太郎は臺所に行ってみると臺所の女中はさつきのにくらしいおばあさんでしたので太郎は一目見るとこはくてたまりませんでしたおばあさんはご主人のお命令なので仕方なしにぶつ／＼いひながら太郎にいふには「私はお前より年も上役も上だからもし私の氣に入らないををする私はお前をた／＼がよいかへ」と申しますと太郎は唯「ば



い」と返事をして其翌日から茶碗も洗へば水も汲むし七つの子供とは思へぬほどすなはによく働らさましたけれどもおばあさんは何とかいつては太郎を叱つたりぶつたりしました、しかし太郎も男子ですから此位のは仕方がないと我慢して働きました、太郎にはまた此上につつらいとありました、それは太郎の室は臺所のわきなので鼠が非常に多く毎夜澤山の鼠がこへ出て来て餌物のとでけんくわをしたり又は太郎の足にかみつくやら面の上をあるさまはつて途にはしつかくやら丸で太郎の部屋は鼠の遊戯室で太郎の身体は鼠のちもちやのようでした夫故太郎は晝の疲れを折角床に入つて癒さうとしても眠ることさへ出来ぬので日一日と疲れてきましたこれが太郎の身にとつては何よりも難儀なのでいつとも人にいふには私は晝の内のお婆さんよりは夜の鼠の方が餘つぽど恐ろしいと申す位でした。

そうこうする内に月日はだん／＼とたつて行き丁度年の暮となりましたので太郎の主人の家では召使のもの各自へそれ／＼お歳暮が出来ますて太郎に



も大枚壹圓のお金を下されました太郎は生れてから壹圓といふお金は始めて見たので大したお金を戴いたと思つて有難く頂戴し大悦びで室に歸り「さあ此お金を何につかひませう」と考へましたが見れば自分の着物がぼろ／＼なので一つ來年から新しい着物を着ませうと思つて大急ぎで古着屋に行きかい「私に相當のを一つ出してくれ」と威勢よく壹圓札を投げ出しました店の者は之を見て驚いていふにはどうして／＼「壹圓ではとても古着でもきものは買へませんよお前さん仕立屋へいつて其破れでも直してもらへば一圓位ですむかもしれないからそうして年をお取りなさい」といひました丁度此時町を大きな聲で猫は要りませんか／＼と賣て歩くものがありました太郎は之をきいて直に毎夜の鼠の苦しみを思ひ出し壹圓できものが買へないなら猫を買つた方がましかもしれないと思つて其猫を見るに頭の丸い尾の短かい丸々とした可愛い猫なので「これはいくらなら買りますか」ときか

したら「たつた五十錢で宜しい」と申したので早速太郎は買ひ受けて家につれて歸りましたが太郎

はお婆さんに見つかつて太郎ばかりでなく猫までも来てご主人の飯をたべると云はれるを心配してさうつと自分の室の中にかくし自分のたべたいご飯を分けて猫にやつて居りましたそれからといふものはもう鼠の心配がなくなりました。太郎の主人は貿易商人で漁船を五六艘も持つてゐますとして年に何度と時をさめて外國に去きます其時は家中の召使までもそれ／＼糸を買たりお茶をかつたり瀬戸物を買つたりして之を主人に托し之を南洋と野蠻人の處へもつていつてあちらの物ととりかへたりお金と換へたりして其儲けは主人が南洋から歸て來てから戴くことになつてゐました丁度又主人が南洋に出かけるので他の人は夫々いゝろんな物をご主人に願ひましたが太郎は何にも出させないので主人は「どうだお前も一つ何か出さないか」と云はれますので太郎は私には何にもありません只有るのは一匹の猫ばかりです」と申しますと主人は「猫でも賣れるかもしれない一つつれて行つて見よう」といはれますので太郎も仕方なく室にかへつて大切に猫を破れたふとんの

中から出して泣く／＼之を主人に渡しますとお婆さんにはじめ他の召使まで大變に笑ひました。太郎は猫が居なくなつてから鼠は又前通りに來て今度もやつぱり夜はろく／＼眠れないで困つて居りました其上お婆さんは意地悪く日一日と烈しくなりましたさうして或時太郎にいふにはお前がご主人に願ひ猫が萬一買れたなら丁度いゝから私に大きな杖を一つ買ておくれ毎日お前をうつだけでも手が痛くてたまらない」と申します、こんな風で太郎は毎日つらい／＼月日を汗水たらして働いて居ました時には逃げ出そうかとも思ひましたが、さてよもう少しでご主人はお歸りになるのだからと目をつぶつて我慢して居ました。お話替て主人は日本を離れてから數月の後或る南洋の一國につきました主人と土人とはもう度々來たのでよくなれてゐるので船がつくとまもなく土人は大悦びで迎へに來て品物を陸上げの手傳をす一方ではどん／＼商賣がはかどつて一日の内に大概うれてしまひました主人はそれ／＼帳面に記しましたが一ツ太郎の猫は餘りよくうられたのでう

れしくて忘れてしまひました主人は殘してゐいた
 一等よい珍らしい日本の品をいくつか王様に献上
 しました王様は大變に悦ばれ主人を召しに
 になつていろ／＼と馳走を下さいました丁度これ
 から飯を戴かうといふ時ふとみると食堂の隅こ
 にまわ／＼澤山の鼠がうちや／＼と固まつてゐて
 じろ／＼と此珍客を見てゐます主人は此鼠が少し
 も人を恐れぬのを不思議に思つて恐る／＼國王に尋
 ねますと王様は「あなたは初めて見るから不思議
 なのだ我國では鼠はもう非常に多くて手の付けよ
 うがない仕方がないからうちやつておくのだお
 國には鼠はゐないか」とおき／＼になりました主人
 は太郎の猫を思ひ出して直に「我國にも鼠は居り
 ますけれども猫といふ鼠を食へる獸がありますの
 で鼠は猫を見るときは出て來させん只今私の船の
 中にも一匹つれて參りました王様もこれを宮中に
 お飼になればもう鼠はよく退治が出來ます」と
 申し上げますと王様は大喜びで「もし此話がかん
 とうなれば私は如何に高くてもいゝから是非買ひ
 度い」と仰しやいました主人は早速に船に歸り猫

をつれて宮中に行きますと王様はもうさつきから
 別のおさしきで待ていらつしやいました主人は鼠
 がさつきのと馳走のお残りを食べに來るところを
 見計らつて其中に猫を放すと思ひかけない強敵の
 來たのに驚いて逃げる追ふ大變な騒ぎで忽ちに一
 匹を捕へてう／＼いひながら食べ始めました王
 様はこれをご覧になつて大變にお喜びになりました
 たが王后は大變に恐がつてゐらつしやいますそこ
 で主人は王后に「猫は鼠をたべますが人には少し
 も害をしませんでよく人になれ誠に可愛いもので
 す」と申し上げたので王后は之を膝に抱き上げま
 したら少しも人に恐れませんでした王様は之を見
 て大に安心なされではこれを宮中に飼ひたいから
 何卒置いていつてくれお禮は之だと云つてたつた一
 匹の猫に十萬圓といふ大した金を下されました
 それから後猫はもう始終王皇后のお側を片時もは
 なれず猫無國宮中で大威張りですぬるには立派な
 おふとんの上喰べるものは鮮らしか魚で丸で王猫
 さまです宮中も亦此から後は鼠も出なくなり王様
 と王后が此猫を愛する事は丸で自分の子供のよ

でした主人は其後數多の儲を得て日本に無事歸り
 召使にもそれ／＼賀易した品物の代を渡しますと
 大した儲けなので家中大喜びでした
 主人は次に又大きなお金のふくろを重さうに出し
 ました皆は一目見てさつと之は主人のだらうと
 思ておますと主人は召使にこれは私のものでは
 ない太郎の猫の代だ「おい／＼太郎は如何した太
 郎を呼んでこい」といふので皆呆氣にとられてお
 ました主人は一同にこの猫の話について話した上
 に「もうこれから誰でも太郎とよんではいけない
 太郎先生といへといつてゐる處へ太郎は出て來ま
 した丁度臺所で水汲をしてゐたので着てゐる破れ
 ぎものは泥や水だらけ面は汚れてあかだらけ髪は
 ばう／＼して草のよゝなので一目見ると皆笑ひ出
 した皆は「太郎先生汝の猫は賣れましたかめでた
 う／＼」といふので太郎は不思儀相な顔をしてゐ
 ると主人自ら手を取つて座につかせよとします
 ので太郎は屹度主人始め皆で私をばかだと思つて嘲
 弄のかと思ひわわ／＼と泣き出して而して云には
 「臺所のおばあさんは私に毎日水をかつがせた上

に私をいぢめまます何卒只今暇を下さいそうすれ
 ばもういぢめられないですみまますから」といふと
 主人は「もう／＼そんなさゝいな事は云はないで
 むらつしやい今先生は私より何層倍といふ大金持
 になりました」といつてさつさのお金を卓の上
 に出して山のよゝにつみましたそして猫の始末を
 すつかり話しましたので太郎も始めて分り夢かと
 計り悦びましたそしていふには「之といふも全く
 ご主人のおかげ又猫を買たお金もご主人が下され
 たお金ですから何卒半分はご主人お受け下さい」と
 と申しましたが主人は決して受けません其處で其
 内の幾何かを召使の友人に分けました其中には始
 終太郎をいぢめたお婆様も、もらひましたそこで
 一人として太郎に感心しない人はありませんでし
 た太郎はもう大金持になりましたがご主人と別れ
 るのを惜しんでそれから主人の家の中に住まは
 して戴き主人に對してはやはり尊敬をして友人に
 對しては元の通り少しもかはらす叮嚀にして毎日
 學校にゆきよく勉強して數年後には學校も辛
 業し立派になつて田舎へ歸りましたとさ。

會 告

本會出版に係る遊戯的手工圖形の儀去月の誌上には出來致したる様記載致し候處印刷所は不都合にも期日に至りて職人の休業等種々なる口實を以て又々延期申出で遂に本月中旬にあらざれば出來致し兼候様に申居候段々の延引定めし御待ち兼と存じ候へども右様の次第にて如何とも致し難く候に付可然御諒承下され度尤も今回は愈間違なく出來致し可申候に付多分本誌御入手の頃は同時に圖形も御入手のことと存じ候右發行延引御斷り迄

(五月五日記)

豫約御申込の方にて代金未拂込の方は平急振替貯金
東京(一七二六六)にて御拂込下され度願上候

定價金五拾錢

郵税六錢

會員は郵税共

金五拾錢

フ レーベル 館 生

● フレーベル館案内

- 一 フレーベル館は東京九段中坂の上にあリ
- 一 フレーベル館は現代に於て最も進歩せる幼児教育思想の普及を計り兼て幼稚園教育の開祖たるフレーベル氏の徳を頌せんとす
- 一 フレーベル館には東京女子高等師範學校内フレイベル會玩具研究本部を置かる
- 一 フレーベル館は玩具繪草紙類、幼稚園恩物材料、手工用具材料、運動具等家庭教育に關する總ての用具及び材料を研究し實費を以て之を販賣す
- 一 フレーベル館は内外の玩具を廣く蒐集し之を分類して見本を陳列し貴客の取捨選擇を便にすると共に店頭に曝したるものを提供せず
- 一 フレーベル館は東土産、九段土産として最も適當したる教育品を廣く蒐集販賣す
- 一 フレーベル館にて御購求の品破損の節は無料にて之を修繕す
- 一 フレーベル館は市内と市外とを問はず御注文品の配達郵送料を申受けず

各女學校御用

美術造花材料一式

半製品及鋸打拔類

摘細工材料

絹縮緬及金銀モール
寫眞臺紙柱掛

瓶細工材料

刺繡用絲及針

東京市本郷區眞砂町十五

卸小賣 百花堂 木村喜兵衛

地方御注文ハ代金引替ニテ郵送ス營業目錄御報次第郵送ス

明治四十二年五月一日印刷
發行

編輯 兼東京市小石川區竹早町七二
發行 和田持直 印刷者

東京市神田區錦町三丁目熊田印刷所内
日下主計 發行所

女子高等師範學校内
フーバー